1 随筆

『徒然草』〈五十四段〉

▼本誌 P.4～5

要旨 法師たちは、山の中に弁当箱を隠し、児を誘い出す。まじないをして弁当箱を出したように見せ、児を驚かせる計画であったが、弁当箱は人に盗まれていて、失敗に終わる。凝った演出は必ずつまらないことになるものだ。

文法詳解図

ポイントを確認しよう　太字は読解・解釈のポイントとなる部分。

御室に、（仁和寺の）御室に　名・格助
いみじき児の（すばらしい児の）　シク・体　名・格助
（あり）けるを、（いらっしゃった）その稚児を、　★ラ変・用　過去・体格助
いかでさそひ出だして遊ばん　**←1** 副　（何とかして誘い出して）遊ぼうと　副詞の呼応（願望）　サ四・用　接助　バ四・未意志・終　格助　マ四・体
と企む法師どもありて、　たくらむ法師たちがいて、　名・格助　ラ変・用　接助　能　芸の達者な
あるあそび法師どもなど　歌舞音曲を専門とする法師たちなどを　ラ変・体　名　格助　副助
かたらひて、　仲間に入れて、　ハ四・用　接助
風流の破子やうのもの、　しゃれた白木の弁当箱のようなものを、　**←2** ナリ・終　格助　名　格助
ねんごろに営み出でて、　丁寧に作り出して、　★ナリ・用　ダ下二・用　接助
箱風情の　箱のような　名　格助
物にしたため入れて、　ものにきちんと整えて入れて、　★課（筆者と仁和寺）ラ四・用　接助　名　格助　マ下二・用　ラ下二・用　接助
双の岡の便よき所に埋み置きて、　（仁和寺の南にある）双の岡の都合のよい場所に埋めておいて、　名　格助　名　ク・体　名　格助　カ四・用　接助
紅葉散らしかけなど、　紅葉を散らしかけなど（して）、　名　カ下二・用　副助
思ひ寄らぬ様にし　（だれも）気づかない様子にし　ラ四・未　打消・体　名　格助　サ変・用
て、（仁和寺の）御所へ（参り）て、　★課（筆者と仁和寺）ラ四・用　接助　名　格助　ワ上一・用　接助
児をそそのかし出でて　稚児を誘い出してしまった。　名　格助　ダ下二・用　完了・用　過去・終
にけり。　（うまくいったので僧たちは）うれしいと思って、　僧たちは　うれし　シク・終　格助　ハ四・用　接助
ありつる苔のむしろに並みゐて、　先ほどの苔の一面に生えた所に並びすわって、　連体　名　格助　名　格助　ワ上一・用　接助
「いたうこそ困じにたれ。　「たいそう疲れてしまった。ああ紅葉を焚くような人（酒や食事を準備してくれる人）がいたらなあ。　副　係助　サ変・用　完了・用　完了・已　感
あはれ紅葉をたかん人もがな。　感　名　格助　カ四・未　婉曲・体　名　終助
験あら　効験があり　名　ラ変・未
ん僧達、祈り（試み）られよ。」　（僧一同）ラ四・用　マ上一・未　尊敬・命　など言ひしろひて、　（先ほど）埋めた　副　ハ四・用　接助
など言い合って、　埋みつる木の下に向きて、　木の下に向かって、　マ四・用　完了・体　名　格助　名　格助　カ四・用　接助
数珠おしすり、　数珠を（両手で）押しもみ、　名　ラ四・用
印　印を　名
ことごとしく結び出でなど　して、　大げさに結び出したりなど　シク・用　ダ下二・用　副助　サ変・用　接助
して、　（若稚）
いらなくふるまひて、　ぎょうぎょうしく振る舞って、　ク・用　ハ四・用　接助
木の葉をかきのけたれど、　木の葉をかきのけたけれども、　名　格助　カ下二・用　完了・已　接助
つやつや　まったく　★副
物も　何も　名　係助
見えず。　（見えず）　**←1** ヤ下二・未　打消・終
所の違ひたるにやとて、　場所が違っているのであろうかと思って、　名　格助　ハ四・用　存続・体　断定・用　係助　格助　接助
掘らぬ所もなく山をあされども、　掘らないところもないくらいに、山（中）を探したけれども、理めたものは　ラ四・未　打消・体　名　係助　ク・用　名　格助　ラ四・已　接助　ク・用
なかりけり。　なかった。　ク・用　過去・終
僧たちが　**←3**
埋みけるを人の　（僧たちが）埋めたのをある人が　マ四・用　連体・体　名　格助　名　格助　八四・用
聞きにくくいさかひ、　聞き苦しく口論して、　ク・用　ク・用　ハ四・用
腹立ちて帰りにけり。　腹を立てて帰ってしまった。　名　格助　ラ四・用　完了・用　過去・終
僧たちが　**←4**
見おきて、　見ておいて、（僧たちが）仁和寺へ参っている間に　課（筆者と仁和寺）カ四・用　接助　名　格助　ラ四・用　存続・体　名　格助　マ四・命（已）　完了・体　断定・用　過去・終
御所へ参りたる間に盗めるなりけり。　盗んだのであった。
法師ども、　法師たちは、　名　格助
言の葉なくて、　言葉もなくて、　名　格助　ク・用　接助
聞きにくくいさかひ、　聞き苦しく口論して、　ク・用　ク・用　ハ四・用
腹立ちて帰りにけり。　腹を立てて帰ってしまった。　名　格助　ラ四・用　完了・用　過去・終
←4
あまりに興あらんとすることは、　あまりにもおもしろくしようとすることは、　副　ク・体　名　係助
必ずあいなきものなり。　（かえって）必ずつまらないことになるものである。

解答のための着眼点

問一（文法）
□A・Cはおぼえておくべき動詞。
□B・Dは「ず」をつけて活用の種類を判別する。
A「あり」…ラ変　下に助動詞「げる」…連用形
B「参らず」…ラ行四段　下に助詞「て」…連用形
C「試みる」…マ行上一段
下に助動詞「られよ」…未然形
D「見えず」…ヤ行下二段　下に助動詞「ず」…未然形

問二（語句）
□ⓐ現代語と異なる意味に注意する。
□ⓑうしろに打消の助動詞「ず」があることに注目。
ⓐ「ねんごろなり」には現代語の「親密だ」の意のほか、「丁寧だ・念入りだ」「一途だ」の意がある。ここは文脈から、「破子のようなものを丁寧に作った」となる。
ⓑ「つやつや」は陳述（呼応）の副詞で、打消の語と呼応して、「まったく（～ない）」の意になる。

問三（解釈）➡1 参照
□①文脈から「いかで～んの」の意味を判別する。
□③省略されている語句があることに気づく。
①このあとで法師たちが児を誘い出していることから、「んの」は意志の助動詞である。「いかで」は陳述（呼応）の副詞で、ここは、意志の「んの」と呼応するので、「何とかして」という願望の意を表している。
③「たる」（存続の助動詞の連体形）と、「にや」の解釈がポイント。また、「所の」の「の」は主格を表している。「にや」は断定の助動詞の連用形＋疑問の係助詞で、下に「あらん」が省略されている。

問四1（文脈）➡2 参照
□前の内容から、法師たちが埋めたものを探す。

知識を活用しよう〈動詞〉

◎注意すべき動詞

《変格活用の複合語》
①「あり」の複合語
「さり」「かかり」「しかり」「持たり」―ラ変
②「す」の複合語
「死す」「具す」「困ず」「甘んず」など―サ変
③「来」の複合語
「詣で来」「出で来」など―カ変

《まぎらわしい語》
「居り」―ラ行変格活用／「居る」―ワ行上一段活用
「来」―カ行変格活用／「来たる」―ラ行四段活用
「す」―サ行変格活用／「為す」―サ行四段活用
「死ぬ」―ナ行変格活用／「死す」―サ行変格活用

《現代語の感覚とズレのある語》
「飽く」「足る」「借る」―四段活用
…現代語では上一段活用
「恨む」―上二段活用…現代語では五段活用

◎属する語が少ない活用の行と種類
①ア行下二段活用→「得」「心得」「所得」
②ザ行下二段活用→「混（交）ず」
③ワ行下二段活用→「植う」「飢う」「据う」
④ヤ行上二段活用→「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」

出典解説・本文解説

『徒然草』は鎌倉時代後期に成立した随筆で、序段および二百四十三段から成る。内容は多岐にわたり、仏教的無常観・老荘的虚無思想・儒教的倫理観が思想の基盤となっている。

本文は第五十四段の全文。文中に出てくる「児」とは、寺院などに預けられて学問をしたり、給仕をさせられたりした少年のことで、女人禁制の寺院にあって、僧たちのあこがれの存在でもあった。本文は、そのかわいらしい児を誘い出そうとたくらんだ僧たちの失敗談である。まぬけな法師を描くなかで、貴重な教訓を私たちに示してくれている。

解答と採点基準

問一　Aあり　B参り　C試み　D見え

問二　ⓐ(イ)　ⓑ(エ)

問三　①何とかして誘い出して遊ぼう（遊びたい）　2点　3点
③場所が違っているのであろうか　2点　3点

問四　1風流の破子やうのもの　3点
2法師たちの祈りの力によって弁当箱が現れた（二十字）　3点

「同意であれば可。「弁当箱」は「破子」でも可。」

問五　埋みけるを

問六　(ウ)

内容を確認しよう
Ⅰ破子　Ⅱなかりけり

知識を確認しよう
①いみじ――すばらしい
したたむ――きちんと整える・整理する
こうず――疲れる
ことごとし――大げさだ・仰々しい
②(イ)
③(1)ワ行下二段活用連用形
(2)ナ行上一段活用未然形
(3)マ行上二段活用連体形
④(1)をる　(2)修せ

法師たちが埋めたものを探せばよい。1～3行目に目を向けると、法師たちが、「風流の破子やうのもの」を作り、箱のような物に入れて「埋み置」いたとある。

2（内容）➡2 参照
□「破子やうのもの」が埋めてあることをふまえる。
法師たちはここに「風流の破子やうのもの」を埋めていた。つまり、まじないをするしぐさをして「破子やうのもの」を掘り出すことで、自分たちの法力でそれが現れたように見せて、児を驚かせようとしたのである。

問五（内容）➡3 参照
□「破子やうのもの」を探していることに注意。
法師たちが探しているのは、埋めておいた「破子やうのもの」。そこで、これについて述べた箇所を探すと、傍線部直後に「埋みけるを」とある。ここを確認すると、「破子やうのもの」を埋めるのを見ていた人が、法師たちのいない隙に盗んだのだとわかる。

問六（読解）➡4 参照
□筆者の主張が述べられた、最後の一文に着目する。
最後の一文で筆者の主張が述べられている。法師たちの失敗談を語ったあとで筆者は、彼らのようにおもしろくしようとすることは、かえって「あいなき（つまらない）」結果になるものだと述べている。
×(ア)　筆者は法師たちの行動を批判的に見ている。
×(イ)　「善意による行為」について述べているのではない。
○(ウ)　最後の一文をふまえた内容になっている。
×(エ)　修行に対する姿勢についてはふれていない。
×(オ)　児は法師たちを「痛い目」にあわせてはいない。

知識を確認しよう（現代語訳）
2　この駿河前司はたいそう力が強かった。
3 (1)前栽などに心をとめて（草木を）植えている。
(2)容貌が世に類を見ないほどすばらしいことを、
(3)どうしてこのように恨むのか。
4 (1)裕福な家の隣に住む者は、
(2)よい行いが自然と修められ、